

賽の神の祭り

いかずち
雷集落で賽の神の祭りに出会いました。新潟県と山形県の県境、朝日連峰に抱かれた山間地の集落。スーパー限界集落だと思えます。高地に位置し、雷が鳴るととくに大きく聞こえることが地名の由来ともいわれています。1991年に小学校が閉校（統合）され、スクールバスを通すための除雪が行われるようになると、それまで行き来できなかった冬にも訪問できるようになりました。以前報告した（2012年4月20日号掲載）、山熊田集落の隣の谷に位置し、似た環境条件です。

今回、思い立って10年ぶりに雷地区に足を運ぶと、廃校になった小学校は、ふれあいセンターとなり以前と変わりのない風景。人の姿を見ないのも、山の姿が美しいことも変わりありません。雪のなかに30軒ほどの住宅が静かにたたずんでいます。

高台にある小学校跡から集落を眺めていると、3人の子どもが遊んでいました。冬ですから、すべての田が雪をかぶった広場。子どもらしく駆け回ります。少しすると、お父さんらしき人も出てきました。「こんにちは」「どこの方ですか」「大阪から来ました。見に行ってもよいですか？」というやり取りの後、広場に下りてみました。広場にはかまくら風の祠が作られています。隣の田んぼには竹が組まれています。



▲燃え上がるとんど

徐々に広場に人が集まり、藁の束を竹に絡ませる作業が始まりました。藁束を投げあげて高いところに絡ませたりします。とんど焼きの準備です。小正月に炎の上がり方でその年の収穫を占うという民俗行事です。こちらでは賽の神の祭りというそうです。雪がないので2月に入ってから実施されているとのこと。

作業中に、広場にはどんどん人が集まり、40人ほどになったのでしょうか。子どもが藁に火をつけ、一気に火炎が上がります。炎の勢いが収まると、村人がアタリメを炎にかざします。それを食べると風邪を引かないそうです。

賽の神の祭りは、もともとは子どもの行事だったそうです。雷では子どもが少ないので大人が手伝い、結果的に子どもより手伝いの大人のほうが中心になっています。子どもが少ないなら、子どもの代わりを大人が務める。壮年が少ないければ熟年がその代わりを務める。伝統行事を残す努力のなかに、現役で働く高齢者の存在意義を感じさせられました。少子化時代には、高齢者が若者の代わりをするしかないようです。シニアカーに乗った暴走族が生まれるかもしれません。

（MBO実践支援センター代表）

